

曹洞俳壇

選・村松五灰子

その筋に告げて安堵の落葉焚く

三重県 寄詰 良平

評 今の時代は焚火などはままならず消防か役所へ届けて許可を得なければならぬ。安全のためなのだろう。

「おちばたき、あたろうか、あたろうよ……」今は、あまり聞かない小学唱歌も懐かしい。庭に焚くその香りも親しい。

行く秋や祖父創業の店を閉づ

神奈川県 佐野 勇

評 祖父より三代、世の中の価値基準も大きく変わった。時代とはいえ、いかんともしたが、孫である自分の代で店を閉じることには深い。「行く秋」に心情。

◆ 一日を過ぐす清しき赤い羽根 京都府 藤野 繁

◆ 振り向いて我が名呼ばるる小六月 千葉県 鈴木 英子

◆ 病む夫の褥瘡じよくそうのなくこの春よ サンパウロ 斉藤 明子

◆ 鶴になる和紙の千代紙文化の日 愛媛県 井上 征郎

◆ 原爆忌戦止まりて生き残る ロサンゼルス 井上 健一

◆ 体調を問はればほち冬薔薇ふゆさうび 奈良県 竹村 和成

◆ 立ち読みの落としており片手袋 愛知県 大竹 妙子

◆ 手を温め孫に触れをり今朝の冬 北海道 中西 千晶

◆ 朝市にやつと探した福寿草 京都府 小林 靖子

◆ 納棺に好みのマフラーハンチング 愛知県 戸田 清子

*選者吟

一對の雛ひいなを祀り妻の部屋

五灰子

*作句小見

水は温み土手や野に土筆・たんぽぽ・啓蟄、楽しい雛祭など春三月は野山は明るく暖かく、暮らしやすくなりました。行ける所まで「一人吟行」などしてみましよう。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

再びのいのちの色よと霜に褪せし小菊の辺り去り難く佇つ
兵庫県 前田あつ子

評 秋口の瑞々しい小菊も色鮮やかだが、霜が降りるころまで咲き続け色褪せながらも別な美しさを見せる小菊。その健気な営みに素通りできない思いを抱く作者。命への深い感動が結句に表れている。人生にも重ねられているようだ。

古里にさびない鍬でありたいと秋の味覚に文添えてあり
東京都 鈴木 正作

評 鍬が錆びないためには使い続けること。農民として鍬をふるって一生を終えたいという決意が上の句の誇りに満ちた言葉を友に書かせた。収穫物への添書きでさり気なさも良い。

◆み仏のみあと訪ねる旅にしてゆたかさとは何かしきり思へり
新潟県 田村 和郎
◆あのちさきいのりをきこしめすかたのそらにいましてほほゑみたまふ
熊本県 島田 佳可

◆唐突に鳴きてさ走る鼠見つ田仕事納めの枯草焼けば
岩手県 穴戸さとる

◆失礼かと気にしつづ履いた運動靴山の墓地まで葬送できた
静岡県 皆川稚映子

◆一番茶あげて香たき手を合わすあの日の義母に会える気がして
岩手県 熊谷美智子

◆独り身で農事一途の友逝けり主なき畑に野菜が繁る
鳥取県 山本 浩一

◆水面を覗けるわれの右頬ゆのそりと緋鯉入りてきたり
福岡県 三吉 誠

◆をちこちの耕作放棄田や畑に丈余の草の勢いを増す
福島県 唯木 秀雄

◆教室の中に二すじ西日さしやがては順に子ら帰りゆく
愛知県 杉原 林作

◆羽音立て渡りの小鳥降り立ちし津波に残る松原寂し
岩手県 関合 新一

*選者詠

抽斗ひくだてに糸の切れたる首飾り一粒一粒孵化待つごとし
ちづ

*作歌小見

田村さんの一首には「インド仏跡巡拝」の添書きがあり物質的豊かさを越えた精神の安らぎの深さなど思われ、シンプルな措辞が湛える深い思索が感じられました。島田さんの全てかな書きの歌には透明感のある祈りが籠ります。



大本山永平寺



峯にも尾にも

早朝の廊下掃除で、ふと仏殿前の梅花を仰ぎ見ますと、小鳥たちが春のおとずれを喜んでいるかのように枝を渡って遊んでいます。

淡雪の輝く山門前には、入門を請う修行僧の姿が見えます。黙って立っているその姿に、背筋が伸びる思いがいたします。

道元禅師さまはある年の春に、次の歌を詠まれました。

「梓弓 春の嵐に 咲きぬらむ 峯にも尾にも 花匂いけり」
この私自身も皆さまも、等しく天地自然の一部であります。静かに坐ってみますと、自分自身の大自然に癒されます。皆、み仏の胸に等しく抱かれているのです。

永平寺にも、皆さまにも等しく春は参ります。どこにおいても、姿勢を調べ、峰の色や谷の響きと一つになって、吾我ごがを離れ、春風のように呼吸をし、その清々しさを忘れずに過ごしたいものがあります。

永平寺では、春風とともに、新到の修行僧が続々と上山して参ります。仏の家に我が身を投げ入れ、仲間とともに、切磋琢磨し修行するのです。

南無釈迦牟尼仏 南無釈迦牟尼仏

ご本山だより



大本山總持寺



春の息吹

山内あちこちで、上山した新しい修行僧たちの澆刺はつらとした声が響いています。總持寺では様々な個性を持った修行僧が僧堂に居住し、お互い和合の精神で辦道精進べんどうしんじんを重ねます。修行とは「仏法を修する」ことであり、仏さまの行いを実践することです。

修行僧は古えより相承そうじょうされてきた仏行としての「行・住・坐・臥が」を日々丁寧に行じ修行に勤いそみます。そういう日々を半年・一年と送るうちに、自然と仏さまのかたちに調えられていくのです。叢林そうりんの素晴らしさは茲ここに存するのであり、總持寺はまさに今「新しい春の息吹」を感じております。

さて、東日本大震災から七年が経過した今年も、三月十日（土）午後二時より大祖堂だいそどうで大震災復興イベント「祈りの夕べ」が開催されます。江川禅師さま大導師にて物故者供養・復興祈願法要が修され、地元の横浜市立上寺尾小学校特別合唱部と福島県立安積黎明高校合唱団によるコンサート、鶴見大学附属高校の生徒によります「復興メッセージと誓いの言葉」が述べられます。夕方には平成救世観音像前で「万灯供養」が行われます。

十八日（日）から二十四日（土）は春季彼岸会。毎日、施食法要が修され、特に二十一日は江川禅師さまが大導師を勤められます。訪れた一〇〇〇人を超える参詣者とともに、犠牲者の冥福と被災地の一日も早い復興を念じる祈りで終日包まれます。